

短 報

## 星槎アートキャンプに見る即興的で国際的な関わり合い： アートを通じた共生の具現化

壽谷 静香\*

Shizuka SUTANI

### 1 はじめに

2019年8月星槎高尾キャンパスにて、第三回星槎アートキャンプが開催された。同キャンプは、2017年より星槎国際高等学校の生徒等及び留学生の参加希望者を対象に毎夏に実施されてきた。星槎国際高等学校のみならず、星槎グループや世界こども財団のサポート、さらに星槎大学の連携も得ながら、多様なアートが交錯して融合し、関わりあって自由に表現する場・時間として、毎年進化を続けてきた。特に第三回を迎えた本キャンプに含まれるアートのジャンルは実に幅広く、美術、演劇、音楽、身体表現に加え、料理やスポーツ、映像を含む電子テクノロジーと、7種目に及んだ。さらに参加者及び指導者の国籍も、エリトリア、ブータン、ミャンマー、アメリカ、日本とこれまでに無く多彩で、国際交流を含む画期的なアートを通じた関わり合いが実現した。さらに星槎国際高等学校の卒業生で、現役の音楽大学学生や、新制作座の指導のもと演劇を専門的に学んでいる専攻科のメンバーも高校生と一緒にキャンプに参加した。

本論では、第三回星槎アートキャンプの事例を報告すると同時に、特に即興性と国際性の二つの観点から、どのように本企画が共生を具現化できたか、検討を加えることとする。前提として、本キャンプでは、アートを蛸壺的な専門から脱却した視座から捉え直している。すなわち、アートキャンプを、音楽や演劇、美術を始め、スポーツや食・料理に至るまで、幅広いアートのジャンルが交錯して関わり合う場として設定した。

以下に本論が扱う用語に若干の検討を加える。キーワードの一つでもある即興性だが、本論が扱う即興は、芸術表現に局限される即興演奏(improvisation)や即興的な表現とは異なり、より広義に、キャンプにおける諸々の内容や意思決定、さらに音楽表現の全てにおいて求められる相互的な関わり合いを示している。例えば、通常の行事であれば主催者側が演目や練習予定をあらかじめ決定し、参加生徒は事前に練習や準備をして臨む。しかし、本キャンプでは、当日初めて出会った仲間と、参加者個々人が、何ができるか、どのようなことに取り組みたいか、お互いの関わり合いの中で話し合いながら内容が決定される。関わり合いのプロセスにおいて、臨機応変な対応が必須となり、個々の参加者や指導者に、

---

2020年12月31日受付 2020年4月13日受理

\* 福岡女子短期大学講師・星槎大学客員研究員

E-mail: sutani@fukuoka-int-u.ac.jp

高い即興性が求められる。この過程がわずか4日間という短い制約の中で達成される点が、毎年実施されてきたキャンプの大きな特徴となってきた。また、国際性に関しても、多くの国からの参加者が集うだけでなく、アートを通じて言葉を越えた関わり合いができる点、異なる国籍の参加者が相互に問題解決し、学び合える点、各国の特色を、アートを通じて紹介する試み等が特色となった。

大前提として、字のごとく共生とは共に生きることである。本論が扱う共生は、お互いの共感理解、相互や相互に関わりあって認め合い、仲間をつくることを意味し、いわゆる生物学上の共生 (symbiosis) とは異なる。しかし、本キャンプでは、多様なアートのジャンルや人が関わり合うことを主眼としており、このことは「人を認める、人を排除しない、仲間を作る」(宮澤, 2013) という星槎の方向性と合致するのである。本論では、アートキャンプの事例の検証を通して、相互の関わり合いがどのように見て取れたか、検討を加える。

## 2 研究方法

2019年8月27日から31日に実施された第三回星槎アートキャンプにおいて、筆者が実践者となり、参与観察を行った。プロの音楽家、元劇団四季の俳優、音楽教育の実践者・研究者としての視座から本企画を概観し、アートキャンプでの活動が、どの様に共生を具現化していたか、検討を加えた。データ収集では、参加者及び指導者による語りを含む活動実践の記録と省察を可能な限りフィールドノートに記述し、終了後に省察した。自身の経験と参加者及び指導者の経験、語り、記述、そして映像や写真を含む観察記録を集積・集約し、ナラティブを構成した。ナラティブ研究は、Clandinin D.J.(2009)の論に立脚して音楽教育の分野で Barrett, M. S., & Stauffer, S. (2009)等が提唱した研究方法である。実践者と参加者が協働して実践を省察し、語りや観察、文章等の多岐に渡るデータを集約し、物語化する研究である。

これまでに筆者を含む研究者等は、「学習場面での学びの関わり合いの雛形」(Akutsu, T, Gordon, R. & Noguchi, K., 2013), 「初学者でも器楽演奏に取り組める指導のアプローチ」(Akutsu, 2019; Sutani & Akutsu, 2019; Akutsu, 2018 ; 筒石, 2009), 「踊っても歌っても、裏方に徹しても誰でも音楽していると捉え直すミュージッキング哲学の実践」(壽谷, 2019)等に、継続的に取り組んできた。これらの先進的な教育実践の取り組みを最大限生かしつつ、アートキャンプを共生や関わり合いに焦点をあてた新たなアクションの一つとして省察することとする。

## 3 実践・事例

初日は星槎高尾キャンパスの大広間に全参加者、指導者が一堂に集合した。初回の全体ミーティングではアートキャンプを2017年に立ち上げた星槎グループ桑原とヴァイオリ

ニストの安久津が中心となり、キャンプの意義や趣旨の共有を行った。テーマは共生、特に *Living together in harmony* と翻訳され、ミーティングは日本語と英語二ヶ国語で行われた。参加生徒、留学生、各部門の指導者、星槎高尾キャンパスのスタッフ間で、星槎の3つの約束である、「人を認める、人を排除しない、仲間を作る」(*Understanding each other, Leave nobody out, Make friends*)の方向性が共有された。具体的には個々が取り組みたいアートのジャンルをとことん深め、他の参加者が追求しているアートも理解する。最終的に、個々が取り組むアートを通して関わりあって仲間を作ることを目的とした。

さらに星槎大学のゴードンが、自身が開発した *Instructional Template(IT)* と呼ばれる関わり合いを促す学びの雛形を用いて、ゲームを含むアイスブレイクを行った。他にも星槎高尾キャンパスの山下シェフ以下食堂のスタッフ、劇団新制作座の講師陣や外部指導者も一堂に会して顔合わせであったが、始終和やかに関わり合いながら時間を共有することができた。このように、限られた時間で、専門的なアートを追求したい参加者が結集している状況にありながらも、個々が追求するアートと直接的に関係しないアイスブレイクやゲームを行うことで、関わり合いが一層深まることを実感した。

同キャンプでは、初日を「考える日」、「できることから練習・制作する日」と定めた。頻回に行われたミーティングでは、個々が取り組みたいアート、グループで取り組みたいプロジェクト、そして全体で取り組む企画として、最終日前日にディナーショーを設定し、それぞれがアートを通じてできることを考案し、それらを組み合わせ「おもてなし」をする趣旨が共有された。横断的かつ複合的内容を講師陣が特定しすぎない課題設定と言える。一方で全員が参加する内容に関しては、企画側が準備をしたチャイコフスキー作曲『くるみ割り人形』の楽曲を題材に設定し、曲をプラットフォームとして、多様なアートを自在に投入するだけでなく、各国や個々のアートの紹介及び全員で取り組むカーテンコールを企画した。同楽曲は、オリジナルの作品はバレエ組曲だが、複数の曲がアラビアや中国、ロシア等、異国の文化をファンタジーの中で表象している。今回はキャンプに参加した各国のメンバーが、『くるみ割り人形』組曲の中から、各国の文化に近い曲を選び、そこに自由な方法で、それぞれの国の文化や取り組んでいるアートを組み合わせ、音楽に乗せて表現する試みを加えた。例えばエリトリアチームは、料理チームが手づくりで焼いたエリトリアのパンを、ロシアの踊りの快活な曲に合わせてテーブル間を陸上競技さながらで活発に走って回って配膳した。ブータンチームは落ち着いたアラビアの踊りを選択し、伝統的な身体表現とあわせて朗読を行った。美術班は巻紙アートを披露し、曲の進行に合わせて絵画が展開されるアイデアを投入した。演劇班は劇団新制作座の指導による日本舞踊と料理班がつくったわらび餅の紹介を組み合わせ、さらに全体のストーリーを創作し、それぞれの出し物を一つにまとめた。最後は『花のワルツ』に合わせて、全参加者が順番にカーテンコールを行い、さらに会場も一体となって、『パプリカ』を踊り楽しく幕を閉じた。

#### 4 省察

星槎国際アートキャンプには以下の特徴的な関わり合いがみられた。第一に4日間に凝縮して求められた高い即興性である。キャンプの前にスタッフ間の打ち合わせや枠組みの設定、参加生徒の情報共有こそ綿密になされているものの、参加者も指導者も、誰が参加するか、何をするか、あるいは何ができるかは当日になってみないとわからない。いわばキャンプが始まってからの同期発火的な関わり合いで、ほぼ全ての進行が即興的に判断され、アート同士がぶつかり合いながら少しずつ形になっていくのである。通常の授業のように、目当てや活動内容、課題、教材や時間割が準備されていないので、参加者にも指導者にも、関わり合いの中での柔軟で臨機応変な対応が求められたのである。参加者からは、「仲間の支えがあれば何とかなる」ことや、「短時間で個人やチームの意見をまとめるのは苦労だったが、解決できた」等、前向きなコメントが多く聞かれた。体験したことがなく、また事前には予想もしなかった、日本舞踊やヴァイオリン、クラシックの楽曲との出逢いが、「最初は不安だったけど、チャレンジできて嬉しかった」等の声もあった。

第二に高い国際性が本キャンプの特色となった。言葉でのコミュニケーションは必ずしも容易ではなかったが、アートという表現や関わり合いの媒体があることで、何とか困難を克服して経験を共有することができていた。期間中器楽演奏やダンス、演劇を教えあう場面も頻繁に観察され、言葉以外の手段も駆使して学びあったり、教えあったり、課題解決をする姿も頻繁に観察された。まさにアートを通じた国際的な関わり合いが実現したと言える。以下が参加者からのコメントである。

- 他国の方も参加するこのアートキャンプですが、互いが互いの言葉が分からないまま、それでも互いに気持ちを伝えようと通じ合った事です。
- 苦労したことはことばが違うからでした。でも最後にみんなが一緒に一つの発表をできました。
- 言葉が通じないのに、2人でお菓子を食べたことが、とても楽しかった。
- あらたな仲間ができたこと。感動したことは留学生もトイレでスリッパをそろえていたところにすごいなとおもいました。
- たくさんの友達と一緒にダンスを踊り、生活をし、練習やミーティングをしたこと、とても嬉しかったです。ごはんがとても美味しかったです。
- 留学生の中からオリンピック出る人もいるから応援しつつ、また来年もアートキャンプであらたな仲間を作り、みんなで楽しみたい。

#### 5 まとめ

本論では、2019年8月に開催された第三回星槎アートキャンプの事例を報告するとともに、プロセスを即興性と国際性の観点から省察した。アートキャンプでは、キャンプにおける関わり合いに内在する即興性と国際性の双方が、共に学ぶプロセスの深化に大いに貢

献していた。さらに参加者が、特にたった4日間という短い期間での出会いから得た新しい仲間と共に過ごす高尾での生活や関わり合いにも、大きな喜びを感じていたことが明らかにされた。アートがあることで、国籍や立場を超えての交流や、様々な困難を協働して乗り越える経験値や変化値が高まったと考えられる。また出来る限り多彩なアートの表現媒体、国籍も含めて、多様な参加者が自由に交流出来る環境づくりが、表現を引き出す鍵になることを実感した。

今後アートキャンプは、一層多様な関わり合いを含有しつつ、継続的に発展させていくことが求められるだろう。個人として専門的な知識や技能を高めることももちろん必要だが、個々が追求する多様なアートで他者と関わりあうこと、さらにお客様をおもてなしすること、これこそが星槎アートキャンプの醍醐味であり大きな特色、意義と考える。

## 文献

- Akutsu, T. (2019). Changes after Suzuki: A retrospective analysis and review of contemporary issues regarding the Suzuki Method in Japan. *International Journal of Music Education*. First Published September 5, 2019.
- Akutsu, T. (2018). Constructing a “fast protocol” for middle school beginner violin classes in Japan. *International Journal of Music Education*. 1-12.
- Akutsu, T, Gordon, R. & Noguchi, K. (2013). Critical pedagogy and children’s musical flow: Curriculum design and assessment. In Lawrence, S (Ed.), *Critical practice in K-12 ducation: Transformative teaching and learning*. PA: IGI Global.
- Barrett, M. S., & Stauffer, S. (Eds.). (2009). *Narrative inquiry in music education: Troubling certainty*. Dordrecht, the Netherlands: Springer.
- Clandinin D.J.(2009). *Troubling Certainty: Narrative possibilities for music education*. In Barrett, M.S.& Stauffer (Ed), *Narrative inquiry in music education*. Springer.
- Sutani, S. & Akutsu, T. (2019). Contextual violin pedagogy for young children. *American String Teachers (AST) Journal*. 56-59.
- 壽谷静香 (2019).「幼稚園におけるミュージッキングの実践」『福岡女子短期大学紀要』84, 福岡女子短期大学.
- 筒石賢昭山(2009).「尺八指導法の実践的研究:東京学芸大学国際クラスでの実践授業・公開講座を通して」『学校音楽教育研究:日本学校音楽教育実践学会紀要』13, 日本学校音楽教育学会.73-74
- 宮澤保夫 (2013) . 『不登校, 学習障がい, 発達障がい生の教育的環境作りについての研究』, 早稲田大学修士論文, 早稲田大学.